

『法華玄義釈籤』の成立過程に関する一考察

池 麗 梅

一、はじめに

『法華玄義釈籤』（『大正藏』卷三三所収、以下、『釈籤』と略す）は、智顗の天台三大部に対して、唐代天台教学の学匠荆溪湛然（七一―七八二）が撰述した注釈書の中で最初に完成したものである。同書は、湛然が天台山で『法華玄義』を講義する際に学生の籤問に応じて随時になされた解説を基本として、後に故郷毘陵での修治を経て、唐代宗広徳二年（七六四）に最終的な完成をみたことは、その序文からほぼ推察できる。従来の『釈籤』の成立に関する論考としては日比宣正『唐代天台学序説——湛然の著作に関する研究——』（東京：山喜房仏書林、一九六六年）が最も詳細、かつ重要であるが、日比氏は、「天宝年間に湛然が『法華玄義』の講義をしたとき、その原本が作成され、その後乾元から上元にかけて、具体的な記述がすめられ、文勢の生起、分節句逗が委細にせられて一応の完成をみた。……その後広徳二年（七六四）に本書は

完全に成立したものと考えられる。すなわち、本書の成立には、原本（籤下所録）・整理本・完成本の三段階が考えられる」（頁二〇三）、としている。

日比氏の『釈籤』の成立過程を三段階に分けるこの構想は基本的には容認できるものである。しかし、その成立段階の区切り方、特にその年代に錯誤があることは見過ごしてはならないであろう。筆者は以前にも、日比「一九六六」の湛然の事跡に対する理解には一つの誤りが存在し、その誤りが日比氏の『止観輔行伝弘決』の成立過程に関する推論に大きな影響を与えたことについて指摘した。その際に考察したのと類似する問題は、同氏の『釈籤』の成立過程に対する認識の中にも含まれるように考える。そこで、本論文では、以前の考察で新たに判明した歴史的事実や湛然の行跡に関する再解釈を踏まえつつ、先行研究に存在する問題点を指摘した上で、『釈籤』の成立過程の再構築を試みたい。

二、問題の所在

日比氏の推論における、(1)原本(籤下所録)」、(2)整理本、(3)完成、という三段階の年代区切りのうち、最も確実なのは、(3)の完成年代である。この年代の決定は、普門の「釈籤縁起序」の最後に見える、「天王越在陝鄂之明年、甲辰歲紀(七六四)、月貞於相(七月)」という記載に基づいており、問題がないように思われる。問題は、それに先立つ、「(1)原本(籤下所録)」と「(2)整理本」という二つの段階の年代設定にある。この二つの年代は、主として湛然の「自序」に見える、「昔於台嶺、隨諸問者籤下所録、不暇尋究文勢生起、亦未委細分節句逗。晚還毘壇、輒添膚飾、裨以管見。」という記述に拠るものであろう。日比氏は、「(1)原本(籤下所録)」の段階を、湛然が台嶺で『法華玄義』を講じ、学生の問に答えた記録をもとに『法華玄義釈籤』の原本(籤下所録)を作成した時期に相当するが、湛然が国清寺で『止観輔行伝弘決』を再書したとされる「元年建巳」よりは前の「天宝年間」と考えている。一方、「(2)整理本」の段階に関しては、日比氏は、湛然が「元年建巳」以後の毘陵滞在中に、『止観輔行伝弘決』を参照しつつ、『釈籤』の整理・記述を行なった期間であると考えている。では、(1)と(2)の年代設定に問題があるとするれば、それはいつどこにあるのであろうか。

『法華玄義釈籤』の成立過程に関する一考察(池)

問題の鍵は、『止観輔行伝弘決』の場合と同様、やはり「元年建巳」という年代の特定にあるように思う。この年代は、『釈籤』の成立過程を区切る年代として、直接には注目されてはいない。しかし、『止観輔行伝弘決』成立過程の考察のみならず、日比氏が『釈籤』の編集過程を探索し、(1)と(2)の年代を設定する際にも決定的な影響を与えている。例えば、『(1)原本(籤下所録)』が成立したといわれる「天宝年間」について見てみよう。実際には、湛然が「天宝年間」に天台山で『法華玄義』を講義したとするこの設定は、特に資料的な裏づけがあつたわけではなく、あくまでも、『止観輔行伝弘決』の「国清再書」の年代「元年建巳」が至徳元年(七五六)であろうという仮説の上に築かれた、いわば二重の仮説だったのである。つまり、湛然が天台山国清寺にいたと伝えられる「元年建巳」が七五六年であるとすれば、湛然は七五六年以前から天台山に来ていたことになるため、「昔於台嶺」という表現が指している天台山滞在の年代は、七五六年以前に遡ることになる。更に、湛然がその「台嶺」滞在中に、『法華玄義』という大部の著作を学生に講義していたとすれば、その滞在は数年ほど続いたものと思われる。そうだとすれば、湛然は七五六年より数年前、つまり天宝年間(七四二―七五六)に、天台山に来ていたことになるであらう。これが、日比氏が「(1)原本(籤下所録)」の成立段階の年代を導き出した筋道

であろう。

次に、『(2)整理本』成立の年代は、『元年建巳』以後、乾元上元年間（七五八―七六二）とされている。具体的には、日比氏では、『元年』以後、湛然が天台山を後にして、乾元年間の初め（七五八）頃に毘陵に至り、この毘陵滞在中に、『止観輔行伝弘決』を参照しつつ、『法華玄義釈籤』を整理・記述した、と推測されている。この成立段階の年代設定にも、明らかに、『元年』を至徳元年（七五六）とする仮説が影響を与えている。

このように見てくると、『釈籤』の成立過程に関する日比氏の構想においては、『元年建巳』という年代の特定が極めて重要な意味を持つことは明らかである。従って、仮に、その『元年建巳』を至徳元年（七五六）とする従来の理解が誤っている場合には、その構想も必然的に修正を迫られることになるであろう。実際に、『元年建巳』は、日比氏が想定した至徳元年（七五六）の四月ではなく、それよりも六年遅れる七六二年の四月であったことは筆者が以前から指摘した通りである。従って、『釈籤』の成立過程に関する日比氏の所説はそのままには認め難く、ある程度の修正を加えなければならなくなるのである。

三、『法華玄義釈籤』の成立過程に関する構想の再構築

これまで、『釈籤』の成立過程をめぐる先行研究における問題点を指摘したが、これからは、そうした問題点を修正し、『釈籤』の成立過程に関する構想を再構築していきたい。筆者が再構築した構想とは、このようなものである。

- (1) 『法華玄義』の講義（乾元年間以降、七六二年、於天台山）
- (2) 『釈籤』を製作（七六二年十月以後、七六四年夏前、於毘陵）
- (3) 最終的完成（七六四年七月、於天台山弘鑑）

筆者は、このように『釈籤』の成立過程に三段階を設定したが、一見すれば明らかのように、この構想は基本的に日比氏の構想を継承するものであるが、改変を、主に(1)『法華玄義』の講義」と(2)『釈籤』の製作」の段階の年代設定に加えたのである。これは、上述の如く、『元年建巳』が紀元七六二年四月を指すことが明らかになったことに伴い、修正を行なったのである。従来『元年建巳』は至徳元年（七五六）の四月と解釈されてきたが、この『元年』とは、唐肅宗の上元二年（七六二）九月二十一日の勅によって同年十一月一日に改元されてから、翌年四月十六日に代宗が年号を『宝応』に改元するまでの期間に使用された、特殊な元号なのである。従って、湛然が国清寺で『止観輔行伝弘決』を再書したのは、

七六二年四月一日から十五日までの間であつたことが明らかとなる。更に、湛然は、それから四ヵ月後の宝応元年（七六二）八月、袁晁の乱が台州臨海で勃発すると（屬海隅喪乱）、天台山を下り、婺州浦陽を経て、同年十月頃に常州（毘陵）へ帰郷し、再び天台山へ戻り仏蘭に登嶺したのは、袁晁の反乱が平定された翌年の広徳二年（七六四）であつたことも判明している。そして、湛然が天台山佛蘭に着いた七六四年の七月に、『釈籤』は、普門の「釈籤縁起序」が冠されて、最終的な完成を遂げたのである。

それでは、七六二年四月に湛然が天台山国清寺にいたとすれば、彼はいつ天台山に行き、そして、どのぐらいの期間にわたつて『法華玄義』を講義したのであろうか。実は、湛然の伝記資料の中には、乾元年間以降、「元年建巳」までの間（七五八―七六二）における彼の行跡を伝える記載が乏しいため、その時期における湛然の事跡は、主として現行本『釈籤』の序文に基づいて推測されている。そのうち、湛然の「自序」には、「昔於台嶺、隨諸問者籤下所録、不暇尋究文勢生起、亦未委細分節句逗。晚還毘壇、輒添膚飾、裨以管見」と見えることから、『釈籤』の本格的撰述は、湛然が天台山を離れ、毘陵へ帰つてから行なわれたが、それに先立つて、湛然は天台山で『法華玄義』を講じていたことが伺える。もちろん「自序」の記載のみによつては、講義の行なわれた具体的年代

は直ちに決め難いが、ある程度の見当はつくとも考える。

というのは、『釈籤』は七六四年の七月に最終的な完成をみたものであるが、その完成年代と、湛然が天台山を後にした七六二年との間にはわずか二年の差ししかないにもかかわらず、『法華玄義』の講義が「昔、台嶺に於いて」行われた、と述べられていることから、湛然は、七六二年に先立つ数年前から天台山に来ており、そこで『法華玄義』を講義していたことがわかるからである。ただ、その到着年代は早くとも乾元年間（七五八―七六〇）以前には遡れないであらう。なぜなら、湛然は至徳二年（七五七）に呉郡開元寺に移籍したばかりであるため、同寺から離れ得たのは、やはり、『止観輔行伝弘決』の初本が一応纏つた乾元年間以降になると思われるからである。以上のことを総じて見れば、湛然は、乾元年間（七五八―七六〇）以降に天台山に到着し、そこで、宝応元年（七六二）までの期間、滞在して、『法華玄義』の講義をしたことになる。従つて、「(1)『法華玄義』の講義」という段階の年代は、乾元年間（七五八―七六〇）以降から宝応元年（七六二）までとすべきであらう。

さて、その期間に行われた『法華玄義』の講義の状況はどのようなものであつたのであろうか。これに関して、湛然の「自序」には、ただ「隨諸問者籤下所録」としか見えないが、普門の「釈籤縁起序」の中に見える、「泊毘壇以至於国清、

『法華玄義釈籤』の成立過程に関する一考察（池）

其従如雲矣。問者島夷作難、海山不寧、徇法之多、仄身巖宇。或謂身危法喪、莫如奉法全身。僊僊遂行、暴露原野。是案法者、請益悅隨、且法實無邊、身則有待、弘敷未暇、籤訪有憑、因籤以釋、思逸功倍。」という記載は注目に値する。これによれば、たくさんの学生を抱えた湛然は、限られた時間をより有効に使うために、学生に『法華玄義』に関する質問を籤に書かせて、その質問籤に対して解説するかたちで講義を進めていたことが伺える。これが、湛然「自序」に見える「隨諸問者籤下所録」の意味するところであり、更には、『法華玄義釈籤』という題名の由来にもなったのであろう。

次に、『法華玄義』の講義が行なわれた場所については、上掲の普門の記述によれば、湛然が天台山に向かう途上から既に多くの学生が同行し、天台山の滞在中にその人数がなおも増え続けたことがわかるが、これだけの大集団が国清寺などの寺院で生活できたのであろうか。少なくとも、普門の序文に見える「仄身巖宇」や「暴露原野」という表現からは、湛然を中心とする集団は、当初、山中や野外で暮らしていたであろうことが推察される。また、もし湛然らが天台山の寺院で共同生活をしていたとすれば、湛然「自序」にも、単に「昔於台嶺、隨諸問者籤下所録」とするだけではなく、やはり具体的な寺名が記載されていただろう。

ここで、天台山の南門とも呼ばれる赤城山に、「釈籤巖」

という史跡が存在していることに注目したい。『嘉定赤城志』を始めとする種々の地方志に、湛然が「天台教を注する」場所として挙げられている釈籤巖は、現在、「悟月洞」とも呼ばれている。この史跡に関する現存最古の記載は、宋代北磻居簡の「釈籤巖記」にしか遡れない。もし、この「釈籤巖記」の記載を信用するならば、湛然は、当初多くの弟子を随伴して天台山に到着したが、彼らは赤城山の悟月洞を中心とする場所で大集団生活を始め、そこで湛然が弟子らのために『法華玄義』の講義をしていた、ということになる。

最後に、「(2)『釈籤』の製作」という規定について見てみよう。前述したように、湛然は元年建巳以後、戦火を避けるために故郷毘陵（毘壇）に帰り、再び天台山へ帰山したのは一年後の広徳二年（七六四）であった。まさにその毘陵滞在中に、湛然は『止観輔行伝弘決』を参照しつつ、『釈籤』を整理・記述したと考えられる。ただ、湛然の毘陵滞在期間は、従来考えられてきたように浦陽重勳（七六二年）以前のことではなく、逆にそれ以後、すなわち、宝応元年（七六二）から広徳二年（七六四）の夏前までという時期に相当するであろう。だとすれば、いわゆる『止観輔行伝弘決』を援用して『釈籤』が本格的に撰述されたと推定される「(2)『釈籤』の製作」の年代は、宝応元年（七六二）から広徳二年（七六四）の夏前までとすべきであろう。

四、結び

筆者は以前、至徳・広徳年間（七五六―七六四）における荆溪湛然（七一―七八二）の事跡を考察する際に、先行諸研究に含まれる疑問点や問題点を検討し、その上で、上元・宝応年間（七六〇―七六四）における天台山仏教教団及び湛然の動向を、当時の歴史状況の中に置いて見直そうとした。その結果、中唐代における天台山および江東仏教教団の動向の一端が判明すると共に、従来の湛然の伝記、特に至徳・広徳年間における湛然の動向についての誤解を修正することもできたと考ええる。

本稿では、その成果が湛然の著作の研究にどのような影響をもたらすかを明らかにしようとする試みの一環として、新たに判明した歴史的事実や湛然の行跡に関する再解釈を踏まえつつ、『釈鑑』の成立過程を理解し直そうとしてきた。その結果、主として日比「二九六六」の研究成果を踏まえながら、その中に見られる歴史学的問題点を修正する形で、『釈鑑』の成立過程に関する構想を改めて呈示することができた、と考える。但し、『釈鑑』という文献の内容上の新旧からなる多層的構造や、湛然本人の思想的变化に関しては触れるには至らなかったため、これらの問題の解決は今後の課題にしたいと考えている。

『法華玄義釈鑑』の成立過程に関する一考察（池）

（キーワード） 湛然、法華玄義釈鑑、止観輔行伝弘決、唐代天台、

国清寺

（東京大学大学院）

cally through the entire text of the *Fahua wenju*, then one cannot say that this is the case, for it must be admitted that there are instances where the application is unsuccessful. When it comes to this kind of scriptural exegesis, the author thinks that perhaps we should be satisfied with simply presenting the basic idea and providing a few exemplary applications on behalf of the reader. In point of fact, interlinear sūtra commentaries consist almost entirely of analytic parsing of sūtra text and explanation of the meaning of individual words.

Finally, the author points out that three of Jizang's four interpretations are not only presented as a discrete set in Huijun's *Dacheng silun xuanyi ji* but that the beginnings of the 'unlimited interpretation' can also be seen there. Moreover, the form of interpretation in Jizang's system that properly corresponds to 'interpretation from the perspective of contemplating the mind' is not the 'unlimited interpretation' but, in fact, the 'contemplation of non-arising (無生觀)' that appears in the *Fahua tonglüe*.

17. Song Tiantai Doctrine in the *Tiantai zhuwen leiji*

Ming-yu LIN

The *Tiantai zhuwen leiji* (天台諸文類集) is the collection of explanations of the classified Tiantai Doctrine which Ruji (如吉) edited in the middle of the Northern Song.

The *Tiantai zhuwen leiji* is an excellent source through which we can approach Song period Tiantai doctrine. However, since it represents an unsystematized state of the doctrine, its importance has not been heretofore appreciated. Here I study the background to the formation of the *Tiantai zhuwen leiji*, and discuss its influence on later Buddhism.

18. The *Fahua Xuanyi Shiqian* by Zhanran: Reconsidering the construction process of the text during 758-764

Li-mei CHI

The *Fahua xuanyi shiqian* by Zhanran (711-782) is considered to be the first and most important commentary on the *Fahua xuanyi* which was lectured by Zhiyi (538-597) and compiled by Guanding (561-632). Basically, the study of the *Shiqian* so far, as well as the other works by Zhanran, has mostly relied on the *Todai tendai-gaku josetsu* (An introduction to the Tendai teachings in the Tang: A study on the works by Tannen, 1966) by Hibi Sensho, who explained how Zhanran had lectured and compiled a commentary on the *Fahua xuanyi* from the Tianbao era (742-756) to the second year of Guangde era (764). Although the outline of Hibi's supposition can be accepted, his argument contains a serious historical error which had a direct effect on his construction process of the *Shiqian*. This article attempts to indicate that historical error and then to reconsider the construction process of the text during the period 758-764.

19. Transformation of understanding of “Honjinanjikyochi 本地難思境智 (The Original Buddha border where Buddha wisdom and Dharma-kaya became one)”

Gikō FUSE

The term “Honjinanjikyochi 本地難思境智 (The inconceivable state of the Original Buddha where Buddha wisdom and Dharma-kaya became one)” can be found in Volume 10 of Chang-an's “the Commentary on the *Fahua wenchu*.” The Original Buddha is revealed in Chapter 16 of the Lotus Sutra, in which the word means the Perfect Enlightenment that the Buddha acquired. The thought of the Original Enlightenment has developed in the Tendai sect of Japan.

The interpretation of the word by Nichiren is similar to the interpretation of Chang-an. However, Nichiren understood the Hommon Sections of the Lotus Sutra as the center of all Buddhist Texts. Therefore, he has come to realize “The inconceivable state of the Original Buddha where Buddha wisdom and Dharma-kaya became one” as the Fundamental Truths of the Lotus Sutra.